

看護学生の職業同一性地位とストレス対処行動の経年的変化

A Longitudinal Study of the Relationship between Occupational Identity Status and Stress-Coping in Nursing Students

土屋八千代^{※1}

Yachiyo Tsuchiya^{※1}

Abstract

The purpose of this longitudinal study was to examine the relationship between occupational identity status and stress-coping of 118 students in two nursing colleges by questionnaire investigation.

The results were as follows :

Occupational identity status were changing with an advanced a school. Most of status was identity achiever, the next was moratorium, foreclosure, last was uncertainty. Proportion of identity achiever ; the first-year students were 55.9%, the second-year students were 44.9%, third-year students were 46.6% and the students before graduation were 62.7%.

Problem-focused coping was increasing with an advance through school, however, emotion-focused coping was not. It becomes as effectived for stress-management as the score of problem-focused coping and emotion-focused coping.

Students of Identity achiever were take up problem-focused coping, but no significant difference between occupational identity status and result of stress-coping at the before graduation.

キーワード : 職業同一性地位, ストレス対処行動, 看護学生, 縦断的調査法
Occupational Identity Status, Stress-Coping, Nursing Students,
Longitudinal Method

I. 序論

人間は誕生から死までの人生周期において様々なストレスに遭遇する。Selye¹⁾の生物学的ストレスの考えを基盤にして、LazarusとFolkmanは環境からの要請が個人の対処能力を超えるとときにストレスとして評価されると考え、ストレス過程に認知的評価を取り入れ、ストレッサーを有害や喪失・脅威と評価するより挑戦と捉えた方が、その対処に意欲的で機能に優れ、より健康的であると述べている^{2,3)}。Lazarusらの考えに因れば、同じストレッサーでも個人の対処能力を含んだ認知的評価によってストレスの意味が異なり、スト

レスはコントロールできることを意味する。看護学生はストレスフルな状況にあり心身共にストレスサインを呈していること⁴⁾⁻¹¹⁾やストレスを正しく認知し対処方法を知ることによって肯定的に変化することが報告されており¹²⁾⁻¹⁵⁾、看護教員としては学生のストレス対処への支援は不可欠とも言える。

認知的評価に影響を及ぼす人的要因はコミットメントと信念であり、コミットメントはその人にとっての重要なもの、意義あるものを表し、信念は重要な結果の統制可能性や自己反応統制の期待感に関係している¹⁶⁾。よって学生の場合、看護職

※1 宮崎大学医学部看護学科 臨床看護学講座
School of Nursing, Miyazaki Medical College, University of Miyazaki

を目指すという進路選択が看護職へのコミットメントや信念の表現の一つと考えられる。松下ら¹⁷⁾は「社会的現実や自分の能力・適性をふまえたうえで自分に向けた生き甲斐ある職業を選びつつあるという感覚」を職業同一性と定義している。以上より職業同一性の地位によって学業ストレスへの認知的評価は異なることが考えられるが、その発達段階を示す同一性地位の規定要因やその変化に関する報告はあるものの^{17)~26)}、ストレス対処行動との関連を明らかにした報告はなかった。

著者は、看護学生のストレス耐性づくりへの支援について検討をしている。今回、職業同一性地位をストレスの認知的評価に影響を及ぼす要因の一つとして位置づけ、看護学生の職業同一性地位と大学生活に対するストレスへの対処行動との関係について、入学から卒業までの経年的変化を明らかにしたいと考え縦断調査を行った。

II. 研究方法

1. 対象者

関東圏内の2カ所の看護短期大学に1998年度に入学した142名。両学長に趣旨を説明し協力の得られた大学で、同意が得られかつ入学時から卒業までの4回の調査に有効回答した118名の学生を解析対象とした。調査は1998年~2000年の各5月及び2001年2月に集合で実施。学生には、研究の趣旨、及び途中で不参加は自由意思で学業とは無関係であること、卒業までの縦断調査であること、研究参加に同意する者は調査表に学籍番号を記載する旨を毎回の調査時に説明した。

2. 調査項目

1) 職業同一性地位

Marcia, J. E.²⁷⁾の同一性地位を一部修正して4項目設定し、現在の自分にもっとも該当するものを一つ選択。設定項目は①看護職になることは自分で決めた。看護職に就きたいと強く考えている(同一性達成)、②将来の職業として看護職を考えているが、まだ決まっていない(モラトリアム)、③幼少からの希望や親の薦めもあって決めた。看護職に就きたいと思ってい

る(早期完了)、④将来看護職に就くかどうかわからない(拡散)から1択。

2) 大学生生活に関わる出来事について

先行研究⁴⁾より抽出された4項目(学習関係、臨地実習関係、大学生生活関係、人間関係)に対して、①この1ヶ月で体験したストレスフルの度合いの順位づけ、②次にストレスフル第一位とした出来事に対する対処について、Lazarusの対処様式(66項目)²⁸⁾を、かなり使用(3点)~使用せず(0点)の4段階評価で得点化。③対処行動の結果は、その出来事の受け止め方と適応及び意欲の3項目について、それぞれ3段階評価を行い、その合計を対処行動の効果の尺度とした。

3) 進路調査

卒業直前のみ調査(就職、進学:助産師・保健師専攻、大学編入、その他)を行った。

3. データの分析

①3年間のデータを各個人毎にデータベース化した。②職業同一性、ストレス順位、ストレス対処行動、対処結果に関しては、各年度別に集計し比較検討した。③対処結果を、平均値を境に良好・平均・不良の3群として、対処行動との関係を検討した。④各年度の職業同一性地位別とストレス対処行動・対処結果の関連性を検討した。⑤対処行動はLazarusらの基準に従って採点し、問題中心型と情動中心型に分別した。問題中心型対処行動は、問題の解決を導く認知的ストラテジーとして28項目(直接行為、情報収集、認知的対処)より構成されている。情動中心型対処行動は、情動の調整を導く情動的ストラテジー38項目(直接行為、行為の抑制、認知的対処)より構成されている。これらの対処法を、使用したか否かは対処法の使用数(絶対的採点)、どの程度使用したかは頻度(相対的採点)により把握した。⑥統計的処理は5%有意水準で統計ソフトHALWINを使用し、比較検討は一元配置の分散分析を行った。

4. 用語の説明

1) 職業的同一性地位

職業的同一性の発達段階を示す。Marciaは危機の有無と傾倒の2つの基準を用いて地位の測定を行っているが、それを基にして中西ら²⁹⁾が作成した「同一性地位に対する自己評価尺度」を一部修正し、次の4段階で示した。①同一性達成：職業選択や決定の時期の危機は過ぎており、選択・決定した職業に深く傾倒している。②モラトリアム：職業選択に関して危機の最中にあり、決心しようと努力している。③早期完了：多くは親の期待と一致する特定の職業に早くから深く傾倒している。④拡散：一定の職業への傾倒をもっていない。

2) ストレス対処行動

ここではストレスをLazarusらの心理的ストレスとして捉える。ストレスに対する対処は、問題解決を主とする問題中心型と情動調整を主とする情動中心型の2ストラテジーに区分し、それぞれの行為はモード（直接行為、情報収集または行為の抑制、認知的対処）で表出される。今回はストレスを学業・実習・人間関係・生活とし、対処行動についてはLazarusの基準に従い、対処法の使用数（用いたか否か：

絶対的採点）と頻度（どの程度用いたか：相対的採点）を測定した。

3) 対処結果（効果）

対処行動の結果、ストレッサーに対しての受け止め方や適応、意欲に対する得点が高い方が効果的であると判定する。ストレスの受け止め方は、「肯定的」、「変わらない」、「否定的」、ストレッサーへの適応は、「適応」、「変わらない」、「不適応」、意欲は、「ある」、「変わらない」、「ない」でそれぞれ3点、2点、1点の3段階評価を行い、その合計得点が高いほど効果的であるとした。

III. 結果

1. 対象者の背景

対象者は女性のみ118名であり、初年度調査時の平均年齢は18.6（±1.8）歳であった。

2. 職業同一性地位の経年的変化

入学時から卒業直前までの経年的変化について図1に示した。職業同一性地位は学年進行とともに有意に変化し（ $p < 0.01$ ），その中で同一性達成が一番多く、1年次の66名（55.9%），2年次53名（44.9%），3年次55名（46.6%），卒業直前は

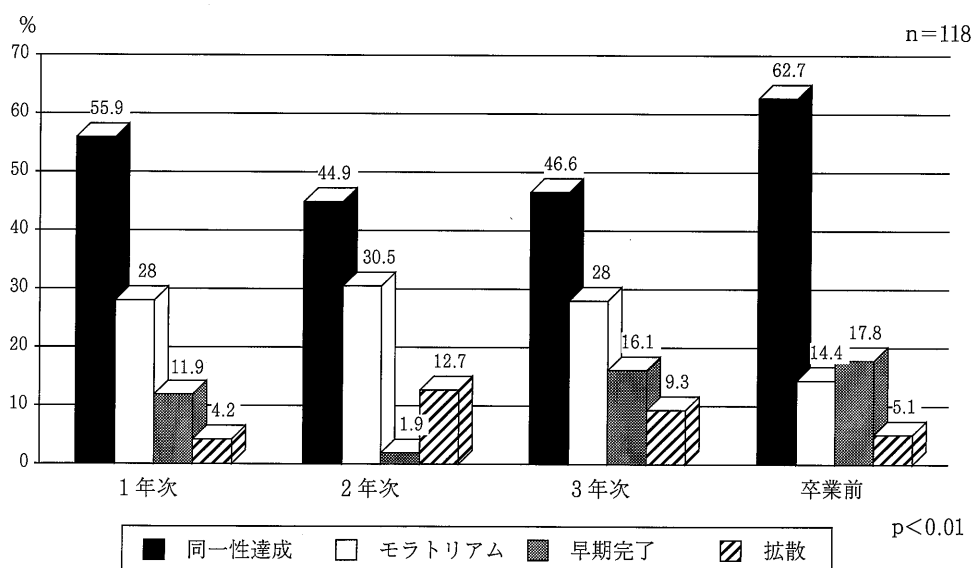


図1. 職業同一性地位の経年的変化

74名(62.7%)であった。モラトリアムは1・2・3年とも30%弱であったが、卒業直前には14%と低下した。早期完了は1・2年次12%であり、3年次16%、卒業直前は17.8%と増加した。拡散は全学年を通して最低値であったが、2年次に12.7%と増加し、卒業直前には5%になり入学時に近づいた。

3. ストレス対処行動の経年的変化

1) ストレッサーの上位項目

1年次は人間関係51名(44.0%)、2年次は学習関係70名(59.3%)、3年次は臨地実習関係62名(52.5%)、卒業直前は学習関係87名(75.0%)であった。

2) ストレス対処とその結果

(1) 対処行動の学年進行による変化

表1に示したように、問題中心型対処行動の使用数平均は19.8(±9.0)点で、すべてのモードの得点は学年進行とともに有意に増加した(p<0.001)。一方、情動中心型の使用数平均

は24.5(±6.2)点で、2年次が少なく卒業直前が多かった(p<0.001)。直接行為は3年次が多く(p<0.001)、行為の抑制(p<0.001)と認知的対処(p<0.01)は卒業直前が多かった。

問題中心型対処行動の使用頻度は35.7(±12.7)点で、最低は2年次、最高は卒業直前であった(p<0.001)。モードは直接行為(p<0.001)と情報収集(p<0.05)は同様の傾向を示したが、認知的対処のみ学年進行とともに有意に増加(p<0.001)した。一方、情動中心型は44.5(±12.8)点で、直接行為(p<0.001)及び行為の抑制と認知的対処(p<0.01)は2年次が少なく、卒業直前に有意に増加した(p<0.001)。

(2) 対処行動の結果

受け止め・適応・意欲の3項目の得点平均は6.95(±1.5)点で、2年次が低く3年次が最高(7.22±1.7)であったが、有意な差はなかった(p<0.06)。

表1. 対処行動の使用数と頻度

n=118

調査時期		1年次 mean±s.d	2年次 mean±s.d	3年次 mean±s.d	卒業前 mean±s.d	年次 変化	
使用数	問題中心	直接行為	4.3±1.7	4.5±1.6	4.8±1.7	5.3±1.5	***
		情報収集	6.3±2.1	6.3±2.0	6.6±2.1	7.2±1.9	***
		認知的対処	8.1±2.4	8.2±2.6	8.5±2.5	9.4±2.5	***
		総計	18.7±5.4	19.0±5.2	19.7±6.0	22.0±5.1	***
	情動中心	直接行為	6.1±1.8	6.1±1.8	7.4±2.3	7.2±1.9	***
		行為の抑制	14.3±3.7	13.3±4.1	13.8±4.6	15.9±4.8	***
		認知的対処	3.5±0.8	3.4±0.8	3.5±0.8	3.7±0.7	**
		総計	23.9±5.3	22.8±5.5	24.6±6.5	26.8±6.6	***
使用頻度	問題中心	直接行為	7.8±3.8	7.7±3.7	8.9±4.0	10.3±3.7	***
		情報収集	12.0±4.9	11.3±4.3	12.1±4.9	13.0±4.7	*
		認知的対処	13.7±5.2	14.0±5.8	14.9±5.5	16.5±5.7	***
		総計	34.3±12.8	33.0±11.9	35.8±12.7	39.8±12.4	***
	情動中心	直接行為	11.8±4.1	11.2±3.6	12.3±4.2	13.3±4.0	***
		行為の抑制	25.7±8.2	23.8±8.5	24.1±9.4	27.6±9.6	**
		認知的対処	7.1±2.7	6.2±2.4	6.7±2.4	7.4±2.2	**
		総計	45.6±12.1	41.2±11.3	43.1±13.0	48.3±13.5	***

問題中心型28項目(直接行為7, 情報収集9, 認知的対処12), 情動中心型38項目(直接行為11, 行為の抑制23, 認知的対処4), 年次変化の有無は時系列のある分散分析を用いた。

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

表2. 対処行動とその結果

n=471

対処法		対処結果	良好 (180) mean±s.d	平均 (226) mean±s.d	不良 (65) mean±s.d
使用数	問題中心	直接行為	5.2±1.4***	4.7±1.6	3.5±2.1
		情報収集	6.9±2.0***	6.6±2.0	5.7±2.1
		認知的対処	9.2±2.2***	8.5±2.4	7.0±3.2
		総計	21.3±4.9***	19.8±5.3	16.2±6.7
	情動中心	直接行為	6.8±2.1	6.8±1.9	6.1±2.4
		行為の抑制	14.0±4.3	14.6±4.5	14.4±4.2
		認知的対処	3.7±0.7***	3.5±0.7	3.0±1.1
		総計	24.5±6.0	24.9±6.1	23.5±6.8
使用頻度	問題中心	直接行為	10.1±3.5***	8.2±3.6	6.3±4.5
		情報収集	13.0±4.7***	11.9±4.6	10.3±4.7
		認知的対処	16.5±5.4***	14.2±5.5	11.8±5.4
		総計	39.8±12.1***	34.6±12.0	28.2±12.8
	情動中心	直接行為	12.9±4.3***	11.9±3.6	10.7±4.3
		行為の抑制	24.2±8.5	25.9±9.5	26.6±8.5
		認知的対処	7.7±2.4***	6.6±2.3	5.2±2.5
		総計	45.1±12.6	44.6±12.9	42.8±12.8

対処結果良好群 (8-9点), 平均群 (6-7点), 不良群 (3-5) 点に区分

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

表3. 職業同一性地位と対処行動

n=472 (各学年118)

対処法		職業同一性地位	同一性達成 n=248	モラトリアム n=119	早期完了 n=68	拡散 n=37
使用数	問題中心	直接行為	5.0±1.6*	4.6±1.7	4.6±1.5	4.1±1.9
		情報収集	6.8±2.0	6.5±2.2	6.4±2.0	6.4±2.0
		認知的対処	9.0±2.3**	8.3±2.8	8.1±2.4	7.5±3.2
		総計	20.6±5.3*	19.3±6.1	19.0±5.2	18.1±6.1
	情動中心	直接行為	6.8±2.05	6.8±2.4	6.4±1.9	6.6±2.0
		行為の抑制	14.3±4.3	14.3±5.0	14.2±4.0	14.7±4.1
		認知的対処	4.0±0.7*	3.4±0.9	3.5±0.7	3.2±1.1
		総計	24.7±5.9	24.5±7.2	24.1±5.4	24.5±6.2
使用頻度	問題中心	直接行為	9.3±4.0**	8.0±3.6	8.2±3.9	7.4±4.2
		情報収集	12.8±4.9*	11.5±4.6	11.2±4.4	11.3±4.1
		認知的対処	15.7±5.4**	13.7±5.8	13.9±5.3	13.4±6.2
		総計	38.1±12.7***	33.5±12.3	33.0±11.6	32.0±12.8
	情動中心	直接行為	12.6±3.9	12.0±4.2	11.3±3.7	11.5±4.4
		行為の抑制	25.5±8.7	25.0±9.9	24.5±9.0	26.7±8.6
		認知的対処	7.3±2.4***	6.2±2.4	6.7±2.5	5.5±2.6
		総計	45.6±12.3	43.5±14.1	42.7±12.0	43.8±12.7

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

(3) 対処行動と結果の関係

対処結果の平均値を境にして3区分(良好群: 8~9点, 平均群: 6~7点, 不良群: 3~5点)し, 対処行動との関係を表2に示した。良好群では, 問題中心型対処行動の全てのモードにおいて, その使用数・頻度の得点が有意に高かった($p<0.001$)。情動中心型で有意であったのは, 認知的対処の使用数・頻度($p<0.001$)と直接行為の使用数のみであった($p<0.001$)。

4. 職業同一性地位とストレス対処及び結果との関係

1) 同一性地位と対処行動との関係

表3に示したように, 問題中心型対処行動の使用数・頻度が共に高いのは同一性達成, モラトリアム, 早期完了, 拡散の順であった($p<0.001$)。同一性達成群は, 問題中心型の使用数では情報収集のみ有意ではなかったが, 直接行為($P<0.05$), 認知的対処($P<0.01$)及び全モードの使用頻度(直接行為 $p<0.01$, 情報収集 $p<0.05$, 認知的対処 $p<0.01$)の得点が有意に高かった。一方, 情動中心型で使用数・頻度共に同一性達成群が有意に高かったのは認知的対処のみであった(使用数 $p<0.05$, 頻度 $p<0.001$)。

対処行動の結果との関係は表4に示したように, 同一性達成群7.2(± 1.4)点, モラトリアム群6.7(± 1.5)点, 早期完了群6.9(± 1.4)点, 拡散群6.3(± 1.7)点であった($p<0.001$)。これらを各年次ごとに見ると, 1・2年次では

早期完了群の得点が高い傾向にあり($p<0.1$), 3年次では同一性達成群が高い($p<0.01$)が, 卒業直前になると殆ど差はなかった($p<0.8$)。

5. 同一性地位と進路との関係

卒業直前の進路調査では107名(90.7%)の回答があった。就職予定者は86名(80.4%), 保健師・助産師専攻予定者は6名(5.6%), 大学編入予定者は14名(13.1%), その他1名であった。就職予定者は, 同一性達成群58名(67.4%), モラトリアム群9名(10.5%), 早期完了群15名(17.4%), 拡散群4名(4.6%)であり, 大学編入予定者は, 同一性達成群6名(42.9%), モラトリアム群5名(35.7%)であった。

IV. 考 察

1. 看護学生の職業同一性地位とストレス対処行動

今回の調査の結果, ①職業同一性地位は学年進行とともに変化する。同一性達成が最も多いが, 1年次に比べて2・3年次に低下し, 卒業直前には最高値を示す。②ストレス対処行動は, 問題中心型の使用数は学年進行とともに増加するが, 使用頻度は2年次が最低で卒業直前に最高値を示す。③情動中心型の使用数と頻度は, 2年次が最低で卒業直前に最高値を示す。④対処行動の効果は, 2年次が低く3年次が最高値を示すが, 有意な差はない。⑤対処行動と効果の関係では, 問題中心型の全モードと情動中心型の認知的対処は, 使用数・頻度共に効果的である。⑥職業同一性地位と対処行動との関係では, 同一性達成群は問題中心型対処行動の使用頻度が有意に高いが, 情動中心

表4. 職業同一性地位と対処結果

結果 同一性地位	総計 (n=471)	1年次 (n=118)	2年次 (n=117)	3年次 (n=118)	卒業前 (n=118)
同一性達成	(248) 7.2 \pm 1.4	(66) 7.2 \pm 1.5	(55) 7.0 \pm 1.5	(55) 7.7 \pm 1.5	(74) 6.9 \pm 1.2
モラトリアム	(118) 6.7 \pm 1.5	(33) 6.6 \pm 1.3	(35) 6.5 \pm 1.4	(33) 7.0 \pm 1.7	(17) 6.6 \pm 1.5
早期完了	(68) 6.9 \pm 1.4	(14) 7.2 \pm 1.1	(14) 7.1 \pm 1.4	(19) 6.7 \pm 1.7	(21) 6.8 \pm 1.3
不 定	(37) 6.4 \pm 1.7	(5) 6.8 \pm 1.6	(15) 6.1 \pm 1.7	(11) 6.2 \pm 1.9	(6) 6.8 \pm 1.1
F値/p	5.89***	16.2/0.18	2.09/0.10	4.16**	0.26/0.85

** $p<0.01$, *** $p<0.001$

型では認知的対処のみ有意に多かった。⑦対処行動の結果は、同一性達成群が有意に効果的であったが、調査時期ごとに見ると、卒業直前には有意な差はなかった、等の特徴が見られた。

Marciaは、職業同一性の発達段階を、危機（個々人が自分にとって意義ある選択事項を積極的に試み、選択し、意志決定を行う一時期）の有無と傾倒（意志決定後に起こる人生の重要な領域に対する積極的関与）の2つの基準を用いて測定している²⁷⁾。同一性達成とは、看護職になることを自己決定し、現在も看護職に傾倒していることを意味しており、このように課題に主体的に取り組み危機を経験しての達成はストレスに耐える力も強い。モラトリアムは、自己の課題として主体的に取り組んでいるが、未だ危機の最中にあり不安が大きい、しかし、自己選択と決定を重視しており外部からの影響を受けにくい。早期完了は、親の価値観で決め、自己の課題として主体的に取り組んでいないことを意味し、遂行量に比べて高い要求水準を持ち、現実対応が的確でないためストレスに弱い。拡散は、危機の経験の有無に拘わらず、一定の職業への傾倒を持っていないと定義されている。今回の調査対象は看護学生であり、看護職を目指して入学してきていることから、職業への傾倒はある（もしくはあった）と考えるが、入学時から一定数の拡散群が存在している。拡散の最も強い影響因子は、「自分に向いた仕事があるのか」という進路決定上の迷いがあることが指摘されている¹⁷⁾。以上、Marsiaの考えからすれば、危機を乗り越えての自己決定で、看護職を志している同一性達成群が望ましい学生像と言える。また、未だ危機の最中にあるモラトリアムの学生が、自己決定していく過程への支援が教育上重要となる。久川²⁶⁾は、看護の学習と同一性達成は螺旋状の発達関係にあることを述べているが、いずれにしても、学生の職業同一性地位がどの位置にあるのかを見極めて、学生個々の職業同一性確立への支援が必要となる。

今回の結果、同一性達成の者は学年を通じて最多であったが、2・3年次に低下して卒業直前には1年次を上回っていた。安藤ら²⁰⁾は、同一性形

成は2年次に低くなり3年次に戻ることで、波多野ら²¹⁾は職業同一性の3段階を、現実を知らない憧れの段階から現実を知っての失望の段階を経て、看護職への同一性が確立・安定していくと述べている。今回の対象者は、2年次に減少した同一性達成群は3年次には戻らず、卒業直前に最高値を示した。これは調査の時期による差、つまり3年次のストレスである臨地実習が終了しているか否かが結果に影響を及ぼしていると考えられる。調査は各年度の5月に実施しており、この時期は臨地実習が開始又は真っ最中である。彼らの同一性達成は、職業選択の自己決定において危機を体験した確固たるものではなく、入学後に現実の過大なストレスに直面したことで、迷いを生じ職業選択を再考しようとしている、つまり危機の最中にあるモラトリアム、あるいは危機を体験していない早期完了に近い状況であったと考えられる。1年次の5月ではまだ憧れが残っているが、その後から2年次の専門科目中心の授業、更には3年次には臨地実習で現実を直視しなければならない。この時期は、職業に対する失望や疑問が生じているのかもしれない。しかし、卒業直前の2月には臨地実習も終了し、既に進路は決定していることから職業同一性が確立・安定してくると言え、波多野ら²¹⁾の職業同一性の3段階と同様の経過を辿っている。また、進路調査で就職予定者のモラトリアム群は9名(10.5%)に比べ、大学編入予定者のモラトリアム群は5名(35.7%)と多かった。モラトリアムは、職業選択を自己の課題として主体的に取り組んでいるが未だ危機の最中にあり、不安は大きいだが自己選択と決定を重視しており、外部の影響を受けにくいとされる。彼らは、在学中を通して危機の状況にあったわけであり、大学への編入は職業決定の結果として選択されたのか、または自己決定していくための手段の一つとして選択されたのか、これは編入生を受け入れる立場にある者としては更なる追究が必要であると考えられる。

2. 職業同一性地位と対処行動の経年的変化及びその結果

対処行動に関しては、問題中心型の対処行動の

使用数は学年進行とともに増加するが、使用頻度及び情動中心型の対処行動の使用数・頻度は2年次が最低で卒業直前が最高であった。すなわち、卒業直前には他の年次に比べて、問題中心型対処行動も情動中心型対処行動を使用する数も頻度も最多となる。これは学年進行とともに遭遇する種々の体験を乗り越えていく過程で、対処行動は獲得されていくこと、及び卒業直前には、就職・進学に加えて関塚ら¹¹⁾の報告にある引越し等、それまでの学生生活で体験しなかった多くの課題への対応が求められることで、対処行動も多岐にわたること等が示唆される。また、対処行動とその結果の関係から見ると、問題中心の対処行動を使用するほど効果的であるが、情動中心の対処行動は認知的対処と直接行為の頻度以外では効果的ではないことが明らかとなった。問題中心型と情動中心型双方とも使用数・頻度は最低であった2年生は、対処結果の得点も低く有効なストレス対処ができていない。先行研究⁴⁾では、2年生は情動中心型が、3年生は情動中心型と問題中心型の両方が多く使用され、Lazarusの指摘のごとく両方の対処行動をとる方がストレス状況や感情好転には有効であることが報告されている。この先行研究は横断調査であることと対処行動は自由記載であったこと、及び卒業直前の調査はされていないが、今回の結果と同様の傾向であった。以上より、特に2年次から3年次にかけては、現実を知って失望の段階にいる学生が多いと推察されることから、個別的な支援体制が必要となる。更に、職業同一性達成の者は、問題中心の対処行動を多く用いており、対処結果の得点も高かったことから、ストレスに上手に対処できていることが明らかとなった。しかし、各学年での対処結果を見ると、同一性達成の者は3年次のみ対処結果の得点が有意に高いが、卒業直前には有意差はなかった。卒業直前には、問題解決型と情動調整型の両方の対処行動の得点が最高値であったことを鑑みれば、この時期になると対処行動選択に影響を及ぼす知識や体験が増加するために、ストレス対処に有効な多様な対処行動がとれるようになってきていることがわかる。また、ストレスによって対処行動は異

なることも考慮する必要がある。今回は3年次は臨地実習、卒業直前は学習関係（国家試験など）が第一のストレスであった。臨地実習では各クール毎に実習場所や指導者が替わり、毎回受け持ち患者の看護過程の展開、更に実習グールの学生間の人間関係もストレスとなる。このため、問題中心の対処行動で解決する課題がある反面、学生個々の努力のみでは対応できない問題もある。一方、学習関係、特に国家試験に関しては合格しなければならない必須の課題としてストレスは大きくても、学生個々の努力で対応できる課題でもあり、進路に関しても夢を持って自己選択していくことが可能である。今回は戦略としては問題中心型が効果的であることが判明したが、それぞれの対処行動のモード（直接行為、情報収集・行為の抑制、認知的対処）に設定された66項目について、各ストレスによって学生がどのような対処行動を採用し、どの対処行動が効果的であったのかについて項目毎に検討していくこと、及び職業同一性地位とストレス対処との関係については、卒後も含めて継続的に検討していく必要がある。

3. 研究の限界

Maciaのidentity statusに関する研究法は文章完成法または面接法によってなされるが、今回は調査表による自己申告であった。看護職の場合は単なる職業同一性ではなく専門家同一性で論じる必要があることも指摘されている³⁰⁾。看護学生は看護職を目指して入学してきた者が多いことから、危機の体験を問わず職業への傾倒はある（もしくはあった）と考えられるが、面接法による確認が必要であった。また、対処行動に関する調査法について、Lazarusは自己報告に基づく測定法は方法の相違も含めて結果にバラツキが生じるが、結果においては他の測定法に劣るものではなく、バラツキを最小限に止めるために自己報告という1つの測定法だけを継続することの重要性を述べている³¹⁾。本研究では、4回の調査とも同様の質問紙で自己報告の形式を一貫したことは妥当と考える。しかし、対象校においてカリキュラムの内容と進行は類似であったが、縦断調査であったため

著者が研究の趣旨説明に毎回出向けなかったこと、及び3回目調査は、3年生が臨地実習のため集合調査ができず回答日が異なったこと、等が問題として残る。今後は、今回の結果を学生指導に還元しつつ、4年制大学生を含めて対象校や数を増やすこと、及び今回除外した休学や留年者、退学者についての検討も必要であると考えらる。

V. 結論

1. 職業同一性地位は学年進行とともに変化する。各学年で同一性達成群が最多で、次いでモラトリアム、早期完了、拡散の順であった。同一性達成は、1年次の56%から2・3年次に低下するが、卒業直前には63%で最高値となった。

2. 問題中心型の対処行動は学年進行とともに増加するが、情動中心型の対処行動は2年次が最低で卒業直前が最高値を示した。対処行動の効果は、2年次が低く3年次が高かった。問題中心型の対処行動並びに情動中心型の認知的対処行動の得点が高いほど、対処行動の結果が効果的であった。

3. 職業同一性地位達成の者の対処行動は、問題中心型の使用数と頻度共に高く、かつ情動中心型の認知的対処の使用頻度も高かった。

4. 卒業直前には、同一性地位と対処行動の結果との関係はなかった。

文献

- 1) Selye H (杉靖三郎ら訳): 現代社会とストレス 原著改訂版, 15, 法政大学出版局, 1988
- 2) Lazarus RS., and Folkman S.: Stress Appraisal, and coping, 19, Springer, 1984
- 3) 前掲2), 32
- 4) 土屋八千代: 看護学生のストレス・コーピングとその要因, 日本看護学会誌, 2(1), 40-50, 1993
- 5) 大森美津子, 高木永子: 入学当初の短大女子学生のストレス・コーピングとその影響因子, 筑波医短大研報, 16, 81-94, 1995
- 6) 大森美津子, 田村由美, 高木永子: 看護基礎教育機関の新入女子学生のストレスに対するコーピング, 香医大看学誌, 1(1), 35-45, 1997
- 7) 河村一海, 西村真実子, 永川宅和: 看護学生のストレスコーピングと行動特性の関係, 金大医短紀要, 19, 123-125, 1995
- 8) 南 妙子, 田村綾子, 市原多香子, 他: 成人(青年期看護学生)のストレスとその対応方法, 徳島医短紀要, 5, 75-81, 1995
- 9) 田中静美, 日隈ふみ子, 木村祥子, 他: 看護短大生における問題対処行動の変化, 藍野学院紀要, 12, 47-52, 1998
- 10) 中村和代, 熊井照彦: 看護学生のストレスに関する要因分析, 看護教育, 37(3), 220-225, 1996
- 11) 関塚真美, 坂井明美, 島田啓子, 他: 卒業前看護学生の心理社会的ストレスの実態 心理社会的尺度と生理学的指標からの評価, 北陸公衆衛生学会誌, 30(1), 12-16, 2003
- 12) 土屋八千代: 看護大学生のストレス構造とマネジメント～行動変容をもたらす体験学習～, 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要, 2, 241-250, 2001
- 13) 山崎裕美子, 安森由美, 佐伯恵子, 他: 看護学生に対するからだところの気づきプログラムの開発と評価, 大阪府立看護大紀要, 4(1), 23-38, 1998
- 14) 安森由美: 看護学生のストレス反応に対する自己統制法の効果, 大阪府立看護短大紀要, 10(1), 55-59, 1988
- 15) 河村一海, 西村真実子, 稲垣美智子: 看護学生の行動特性, 性格特性, ストレスコーピング 臨床実習前後における変化も含めて, タイプA, 11(1), 39-47, 2000
- 16) 前掲2), 80
- 17) 松下由美子, 木村 周: 看護学生の職業的同一性形成を規定する要因の検討, 教育相談研究, 31, 29-45, 1993
- 18) 松下由美子, 荒木美千子, 木村 周: 看護学生の職業同一性形成に関する研究—同一性地位面接による分析—, 神奈川県立衛生短期大学紀要, 26, 5-22, 1993

- 19) 松下由美子, 木村周: 看護学生の進路選択と職業同一性形成との関連, 進路指導研究, 17(2), 12-18, 1997
- 20) 安藤詳子, 内海 晃: 看護学生の自我同一性に関する研究—職業同一性形成を規程する教育要因, 日本看護研究学会雑誌, 18(3), 7-19, 1995
- 21) 波多野梗子, 小野寺社紀: 看護学生及び看護婦の職業的アイデンティティの変化, 日本看護研究学会雑誌, 16(4), 21-28, 1993
- 22) 渡邊順子, 江幡美智子, 入江晶子: 看護学生の職業意識と職業志向Ⅱ. 3年間における職業意識行動の変化, 名大医短紀要, 4, 21-30, 1992
- 23) 宮武陽子: 臨床実習における看護学生のアイデンティティストレス—経験が学生の個性化, 社会化に及ぼす影響, 香医大看護学誌, 1(1), 115-126, 1997
- 24) 前田明子: 看護学臨地実習における教師の指導行動と学生の看護職同一性形成の関連 指導に対する教師自身と学生の評価を用いて, 天使大学紀要, 2, 1-12, 2002
- 25) 山田敏久, 田中奈緒子, 吉村真理子: 大学生の自我同一性とストレス, CANPUS HEALTH, 36(1), 364-367, 2000
- 26) 久川洋子: 看護学生におけるアイデンティティ達成状況と学習行動の関連, 天使女子短期大学紀要, 18, 1-13, 1997
- 27) Marcia JE & Friedman ML: Ego identity status in college women, Journal of Personality, 38, 249-263, 1970
- 28) 前掲2), 328-333
- 29) 中西信男, 永野正憲, 古市裕一, 他: アイデンティティの心理, 217, 有斐閣選書, 1985
- 30) 鑓幹八郎, 山本 力, 宮下一博: アイデンティティ研究の展望Ⅰ, 166, ナカニシヤ出版, 1984
- 31) 前掲2), 346